

初心者へのワンポイント養蜂アドバイス

< 専業養蜂家の飼育法 >

九州中北部、本州太平洋側周辺の平均的な養蜂を念頭に置いて記した助言であり、全国的に通用するものではない。地域によっては蜜源・花粉源が異なるのが普通であり、必ずしもマニュアルとして役立つとは限らない。年間を通しての地域の気候・植物相をよく観察して、その地域に適合する飼育方法を確立することが重要。

1. 越冬

- (1) ヘギイタダニの寄生状態をチェックする。(シュガーロール法が最適)
寄生率が2%以上であれば、直ちに駆除をする。(別資料)

- (2) 継ぎ箱群を解消・成蜂を密集させる。

貯蜜巣脾・産卵巣脾以外の空巣脾を巣箱から撤去し、単箱（育児箱）に蜂を降ろして蜂を密集状態にする。または継ぎ箱に蜂を残して、継ぎ箱から出入りさせるために小孔を設けてもよい。下段育児箱には空巣脾を収納し、ベニヤや麻袋で遮断する。ただしわずかな隙間を片隅に残せば、下段の往来ができるので、暖かい日には下段の残蜜を取りに行く。

- (3) 防寒対策

セイタカアワダチ草の流蜜終了後、11月上～中旬に巣箱内部に断熱材。蜂を密集させて断熱材で囲わなければ、極寒期には貯蜜が結晶するため摂取することができず、貯蜜を残したまま餓死することがある。

ビニールカバーは結露を生じるので不適。巣門幅を縮める。

2. 春の建勢

- (1) 巢内の断熱材は、桜の開花頃まではそのまましておく。

- (2) 早春、日が長くなると産卵が再開する。→蜜や花粉の消費が進む。

春に若蜂の出房が始まると急速に貯蜜が減る。餌切れしないように貯蜜巣脾と軽い巣脾を入れ替える。貯蜜巣脾の無い場合は、糖液給餌をする。花粉（放射線処理済み）や代用花粉パテを与えると産卵育児に効果がある。

- (3) 成蜂が育児箱に7～8枚程度に増えるまで余分な空巣脾は追加せず、巣脾全面に溢れる状態を保つ。(産卵育児圏の適温は35℃。)

- (4) 桜の流蜜が始まれば、継ぎ箱にすべての巣脾を移動して、下段の育児箱に、空巣脾または巣礎枠を数枚入れる。(分封熱発生を防ぐ。)
- (5) 雄蜂巣礎枠を1~2枚(全巣脾の約10%)挿入しておくこと、他の巣枠が働蜂房のままに保たれる他、ヘギイタダニをトラップして寄生状態をチェックしたり、駆除したりすることに役立つ。
- (6) 隔王版を使う人は、上下12枚程度に増えた時点でセットしてもよい。その時、できるだけ空巣脾を下段に、育児巣脾を上段に置く。(隔王版の上手な使い方参照) 下段の巣脾に蜂が十分に下りれば採蜜してよい。

3. 採蜜

- (1) 初回採蜜時には、できるだけ丁寧に蜜蓋を切って、古い蜜を振るい出し、その後流蜜する品質の良いレンゲやアカシアに混ざらないようにする。ラジアル式遠心分離機のある人は、すべての巣脾を遠心分離してもよい。遠心分離した後の巣脾は、隔王版の下、下段の育児箱に移し替える。
- (2) さらに2段満群になれば、継箱をもう1段増やす。その場合、隔王版は2段目と3段目の間に挿入する。そうすれば分蜂熱はほぼ無くなるので、上記下線の作業は必要なくなり、その後は機械的に3段目だけを採蜜できる。
- (3) 花の最盛期に好天が続くと、予想外の流蜜がある。最低でも1週間に1度は内検をする。更新王台があれば、旧王を2~3枚程度の蜂と共に別の巣箱に移す。同時に形の良い王台を一つだけ残し、残りを切除する。

4. 採蜜シーズン終了後の管理

- (1) 蜂群分割
翌年にも現有群数を維持するのであれば、まだ流蜜がある間に分割して群数を増やしておく。更新王台があれば利用する。変成王台で増群する場合は糖液や花粉又は代用花粉のパテを与えて、できるだけ大きい王台を作らせるように努める。性質の荒い群を分割する時は、おとなしい群から産卵巣脾を1枚挿入して印を付け、その巣脾に出来た変成王台を利用して女王蜂養成をする。王台人工養成技術のある人は、1週間前に済ませておく。
- (2) ダニ駆除
シュガーロール法でダニ寄生状態を把握する。継ぎ箱群を分割する前に済ませれば手間が省ける。0%であれば駆除の必要は無い。

ダニの寄生が認められた場合は、分割後、新王が完成（交尾を済ませて産卵を開始した頃＝最も封蓋蜂児が少ない時）に駆除薬を投与する。

駆除薬の選択は、それ以前に、「何を、いつ、何回、何年使って来たか？」によって決まる。その年か前年に他の業者から購入した群であれば、以前に使用した薬剤について問い合わせ確かめておく。漫然と同じ駆除薬を使ってはならない。

(3) 越夏対策

気温が高い夏場は冬以上にミツバチにとって過酷なシーズン。

この時期の管理が秋の蜂群の充実度を決め、さらに翌年の成績を左右する。

- ① 冷涼な山間部に移動する。ただしスズメバチや熊の被害に注意が必要。
- ② 定飼を続けて貯蜜や花粉が不足する場合は、糖液・パテで補給する。
- ③ 7月中旬からはキイロスズメバチ、8月にはオオスズメバチの襲撃が始まるので、捕殺器や粘着シートなどで対応する。

5. 病気対策

- (1) ダニは多くのウイルス病を媒介し、麻痺病などを起こす。吸血の結果、成蜂は短命になり巣内温度が下がり、チョーク病発症の原因にもなる。
免疫力低下によってアメリカ腐蛆病にも罹り易くなると考えられている。
したがって、ヘギイタダニ対策が最も重要で、すべてに優先する。
- (2) 廃業者から空巣脾や巣箱を譲り受けて安易に再使用しない、由来不明のハチミツを給餌しないこと。ただし、ガンマ線照射すれば問題は無い。
- (3) 積み上げた空巣脾や蜜巣には盗蜂が寄り付かないように管理する。
- (4) 普段から病気の症状などについて、文献を求めて理解を深めておく。
- (5) 病気を疑う症状が見られる時は、家畜保健衛生所に連絡する。
- (6) 周辺の農薬使用の実態を調べておく。散布者は何をいつ散布するかを通知する義務がある。

文責

(有) 俵 養蜂場
俵 博